

# 談話室



随想 「自国の欠点を自覚・克服し、自

分の国を高めること」

虎長 (39卒)

戦艦大和ノ最期」を著わした吉田満は「靖国と愛国心」(1974)で、自分の国を無条件に賛美するのではなく、むしろ自分の国の欠陥をはつきりと自覚し、これを克服することによって、自分の国をいっそう高めていこうとするのが、真の愛国心である」との家永三郎の言葉を引用している。もちろん、家永の念頭にあったのは、アジア侵略と自らの亡国をもたらした戦争である。この説は、しかし、過去への反省のみならず、現状についての自覚においても噛み締めべき至言ではなからうか。そのように痛感したのは、6月21日の沖村講師の講演で、日本の科学技術振興における中国からの大幅な立ち遅れを教えられたからだ。

中国嫌いな人は、中国を褒めすぎた講演と思つたかもしれない。しかし、事実と数字に裏付けされた中国の躍進ぶ

りには驚かされた。その政策には、日本が学ぶ点が多い。僕だって、中国の食品の安全性には懐疑的だし、人権軽視・少数民族圧迫では中国はひどいと思う。だからと言って、中国を蔑視し、学ぶべきところを学ばないのは損であり、国益に反する。

科学技術についても、中国のスパコンは、仕様を実用より世界ランキング評価指標にあわせている」論文の品質指標である引用回数を増やすため、中国人どうして引用を頻繁にし合っている」などの噂は僕も信じる。しかし、ずるい」汚い」と、ヘイト・スピーカーと同列の一部マスコミと一緒に罵られても、何ら生産的でない。過去の業績で選ばれる、ノーベル賞受賞者数の比較をして自己満足するのも危険。これから受賞者数の逆転が起こらないような政策が日本には重要。国・企業・大学が一致協力し、巨額の投資を、グローバルな視点で科学技術振興に振り向けている点は中国に学ばねばなるまい。国会でカケ・モリ問題など下らんことを議論しているときか?との声もあったが、追及する野党が悪いのではない。こんな問題を起こした政権と文科省が悪い。文科省は予算カットによる大学いじめを止め、国の教育予算大幅増額に努めるべきだ。注意すべきは、科学技術重視が実学重視、リベラルアーツ軽視に拍車

をかけないことである。

自慢してもヘイトスピーチをしても、尊敬はされず、自己の利益にもならない。サッカー日本チームのサポーターによる試合後のくず拾いを、相手セネガルチームのサポーターが「よいことだ」と言つて真似た、というのではないか。自らは真似られる程のよいことをしよう。他国のよいものは、国を問わず、積極的に学び、そして自国を高めよう。以上



沖村憲樹先生の講演を聴いて

慈海 (39卒)

長年、中国の科学技術を応援、状況を熟知する先生ならでの素晴らしい講演でした。

1 当局者への率直な少子化問題の指摘、国産EVへの卑劣な「補助金」の批判などから、先生の単なる親中国に偏らない公正な立ち位置がわかり、講演内容をより信頼できた。

2 宇宙・海洋・原子力・モバイルまで対象に、大学を中心に教育、グローバル化、ハイテク化、重点化して、国家計画として取り組んでおり、科学技術振興は既に世界一の水準にある由。

3 中国は地政学的優位に立つユーラシア大陸の中心、14億、単一言語、独裁・国家計画の規律ある実行の史上初の 超高効率の巨大な経済軍事共同体であると。強権的「なのが問題。

4 毛沢東が、科学技術、教育予算は増加させ減らさないと決めた。屈辱の歴史に学び、軍事強国化と一体の政策と見える。日本側にも問題はあがるが極端な「歴史」教育は変更出来ないだろうか。

5 少子化問題が最大の問題であるが、出生率1.0%という実態は公表されず、政策が緩和されても教育・育児負担で出生率は向上していないという「実態は、知られていないようだ。

6 先生は中国人は「日本人が好き」といわれる。長年アジア(100%)は中国の若者を日本に留学させる「さくらサイエンスプラン」を実施されてきたご自身の体験を踏まえた重い言葉である。

以上

## 沖村先生

花崎俊雄（33卒）

大変に多くの資料に基づき、明快なお話で、非常に説得力がありました。中国が米國を抜くに至っていることは報道で承知していますが、どこか内心では誤報ではと疑っていました。世界最高水準の膨大な数と意欲ある学生への高等教育と研究体制、その社会連携が1000近くの主要大学でのサイエンスパークや、やはり1000近くの国家ハイテクパーク、2000以上の地方政府・自治体等のハイテクパークなどで、着実に進行し成果を挙げていることなど、想像を超えるものです。

日本が立ち止まっている間に一気に抜き去り、あらためて日本の立ち位置を再検討しなければと痛感しています。中国が遅れていると思っていた環境問題も最新の原子力発電、再生エネルギー、EV化で克服しつつあります。少子高齢化は課題先進国として日本が一步先を行っていると思います。又高度な素材や精密部品加工技術など未だ日本が強い分野があります。かつての科学技術大國

日本はどうかになっているのか？ 考えさせられます。

未だ構想の段階ですが、日本のプレジデンスの低下への危機感から「世界未来フォーラム瀬戸内2018 in 高松」を構想しています。同郷で大先輩の大平正芳元総理の故郷香川県で、県市などとも相談して進めています。

## 寸評

越後伸一

（神戸大 32卒）

昨日は中国と日本の格差に驚くのみでした。基本的ここ十年の進歩の早さその間日本は何をしていたか。文科省所管では駄目です。やはり日本の官僚の資質でしょうか。

茶話会出られず残念でしたが何か面白い話題ありましたでしょうか。

## 雑感

末次浩之（39卒）

中国については群盲象を撫でるの感があります。もともと中国については我々は全く知らない対象ではなく人によって違いがあると思えますが過去についてある程度知識をもっていることが象を初見する場合とは違いますが講師は科学

技術という側面に絞り現代国の科学知識について数字をもって他国との比較を浮き出させて中国の優位性を説明されました。中国、三日会わざれば刮目すべしと感じました。

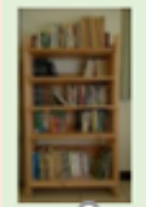
個人的な感想ですが日本の科学技術の遅れについて話される以上に中国にすつかりほれ込んでおられるように感じました。

ここまで現代中国を信任されておられる方は私には初めてです。

資料を前日に拝見し十一月記念すべき百回まで予定が立っていることに初めて驚きました。



## 書架



7月講師 松尾文夫氏と『銃を持つ民主主義—アメリカという国』の「なりたち」』  
（2004・3小学館）

事務局 松井和明

### 1 松尾文夫先生のこと

1 福井でB 29の夜間爆撃を受け、爆撃のショックが、いつまでも残った。アメリカとはどういう国なのか「なぜ戦争をしたのか」、ジャーナリストを志しアメリカの特派員となつてその問いに答えを出すことにチャレンジしたい」と夢見た。

2 1956年4月共同通信社入社、NY・ワシントン特派員（64-69年）、ワシントン支局長（81-84年）。アメリカは近いようで遠い国、正体は捉え難く、同社退任後、2002年5月現役に復帰、アメリカという国をもう一度知ること」に改めて挑戦する。

3 1995年2月、独ドレスデン無差別爆撃50周年追悼行事のTVニュース—独大統領の死者の相殺はできない。

非戦闘員爆撃の責任を認めさせる」演説に衝撃を受け、広島・ハワイへの大統領と首相の相互献花」を提言、2017年に実現させた。

4 朝鮮戦争で米国が北朝鮮の非戦闘員に百万人を空爆殺戮、米・フィリピン領有と日・朝鮮併合を容認する「桂・タフト秘密協定の存在を指摘。残る東アジアの歴史」問題には、中国・北朝鮮と日本との和解を回避させたアメリカの政策があると。

5 著書のうち、7月会場で販売予定の『銃を持つ民主主義』と『アメリカと中国』は著者のライフワークの結晶といえる名著である。米中関係は「184年にスタート、儒教の啓蒙思想家への影響、米中の特別な関係、毛沢東の胡適やデューイの影響、など興味深い。

## 2 『銃を持つ民主主義ーアメリカという国』のなりたち

本書は、ライフワーク『アメリカとはなにか』の集大成である。経済格差や民主主義の硬直化で国民の分断が目立つ時代、大統領もオバマからトランプに変わり、政策は極端に変わる。米国の民主主義には銃を持つ武力行使をためらわないDNAがあり、建国以来の歴史は武力行使の歴史で

もあつた。以下に、本書が解明する『アメリカという国』の知られざる実態を見てゆきたい。

1 武力のアメリカと出会う：42年本土初爆撃で東条が衝撃を受け、ミッドウェイ海戦を急ぎ、大敗に繋がる契機となったドーリットル爆撃隊長機を見た日本の2大都市の非戦闘員に対する夜間無差別焼夷弾爆撃「戦術を立案、民間人を大量虐殺、その後、原爆使用を強調したルメイ。その軌跡には武力行使をためらわないアメリカのDNAがある。ルメイに対し日本は最高の勲章を授与。

2 武力行使をためらわないアメリカのDNA：アメリカ合衆国憲法「修正第二二条 規律ある民兵は自由な国家にとつて必要、人民が武器を保有し携帯する権利を侵してはならない」こそ、そのDNAの象徴であり、解釈、最高裁判例も割れている。建国以来、原住民、仏・英との戦争、南北戦争など武力行使の歴史。アメリカ民主主義の理念そのものが武力行使のDNAを組み込んでいる。

3 西を目指す『明確な天命』(西への拡大、アジア・太平洋へも拡大)：1803年6州を仏より購入、

1803年モンロー大統領はモンロー・ドクトリン(アメリカと欧州は相互に介入しない)はアジア・太平洋への拡大は拘束されずと。1859年から、テキサス、オレゴン、メキシコ、カリフォルニア、ニュー

メキシコ強奪、アラスカ、ハワイ、フィリピン、中日の門戸開放まで、武力行使のDNAを秘める。

## 4 興味深い大統領・ネオコンなどの識者の評価

レーガン：レーガン大統領には、国家指導者としての安定感がある。激しいことも言うが、実際の行動は極めて現実的で、安心していられる。この安定感はいゼンハワー以来」。1947年から5年間、全米俳優組合委員長。赤狩り旋風の難しい時期であつたがレーガン委員長は巧みなバランス感覚で組織を守つた」。冷戦へ激化ではなくその終結を目標にしていた」。

J・ブッシュ：気さくで誰とでも仲良くなれる人気者。成績はCクラスで自ら「非インテリ」と位置づけるが、一度会った人の名前を忘れない抜群の記憶力で知られる。プロからは党派を超え一定の評価」、42才でアル中を克服、酒は飲まない。Hハウスの情報漏れがない規律の良さは歴史的

に前例がない。個人的信頼関係を梃子とするバランス感覚が抜群。

ラムスフェルト：元海軍パイロット、海軍のレスリング・チャンピオン、自信と野心に満ちた典型的なパワーエリート。ニクソンの経済機会局長時代、先生は日本で会う。フォード政権首席補佐官、最年少の国防長官、その後の会社社長時に、先生はレーガン政権のニュー・スー・ス紹介を依頼、チェイニーを紹介される。手抜きをしない親切で手堅い人」、下院議員キャリアもある。

チェイニー：打てば響く大変なやり手、ラムスフェルトは私の恩師、彼の言うことは何でも聞くのでほとんど質問してくれ」と。ラムスフェルトの特別補佐官を務めた関係が副大統領と国防長官と序列が逆転しても師弟関係は変わらず。フォード政権でラムスフェルトの次の首席補佐官、下院議員にもなる。父ブッシュの国防長官でパウエルと湾岸戦争を仕切つた。

以上